

女媧神話における生育問題と道家の生成観

孫 樹林

盤古が天地を切り拓いた後の世は、人間などの生命がおらず、荒涼たる世界であった。そこで、人を造る始祖神女媧が盤古に次いで中国文明史に登場した。

女媧は人を造るばかりではなく、創世や文化伝授なども行った。彼女の主なる功績は、土を捏ねて人を造る他、石を練って天を補修して世人を救うこと、婚姻制度を定めて人類を繁殖させること、笙簧を発明して人類を教化するなどである。

女媧の功績について、「上際九天、下契黄墟、名声被後世、光輝重万物」（上は九天を際め、下は黄墟を服し、名声は後世に被り、光輝は万物より重し）（注1）と言われ、史上における評価はきわめて高い。

I. 女媧の名称と外貌

女媧について、古書に次のように記述されている。

女媧、古神女而帝者。人面蛇身、一日七十変。（『山海経』「大荒西経」、郭璞注）

女媧、古の神女であり天帝だった者で、人面にして蛇身である。一日のうちに七十変する。

華胥生男子為伏羲、生女子為女媧、故世言女媧伏羲之妹。（『通志』「三皇紀」）

華胥、男子を生んで伏羲であり、女子を生んで女媧である。ゆえに世間では女媧と伏羲を兄妹とする。

前記の記述によれば、女媧は人の顔で蛇の身体であり、華胥の末裔であり、伏羲を補佐し、のち女帝となる者である。

女媧の媧という文字の意味について、諸説があり、以下はその大概である。

『説文解字』では「媧、古之神聖女、化万物者也。从女、高声」と記す。字形から見れば、「高」の原形は上下二つのリングから構成され、すなわち水の波紋から構成されるので、この「高」は「渦」の本字と考えられる。「渦」は水の渦を指すゆえ、「高」の本意は水の渦を指すことを仮借して「水神」「水女神」を指すのであろう。「高」はそもそも女媧を指していたが、のちに女偏を付け加えられたうえ、「女」をつけると「女媧」になった（注2）という。

女媧は治水の業績により、「陰帝」と言われるが、この名称は「媧」とも関係があるのか。「女媧」はもともと蛙であり、女性の性器の象徴であったが、のちに女性の象徴となり、さらには生殖の女神のシンボルに移り変わった（注3）という説がある。これに対し、「女媧」は、「人類を生育する元始の祖母」という意味であり、生まれたばかりの赤ん坊の泣き声がこの「媧」と同音なので、そして赤ん坊の泣き声が蛙の鳴き声にも相似していることから「女

媧」と言われるわけであろう、という指摘（注4）もある。すなわち、女系の部族を中心とした時代において、外形が女性の性器に似てかつ繁殖力が高い蛙への崇拜が「女媧」という名称に至ったものと思われるわけである。

女媧は「人面蛇身」または「人首蛇身」とされている。この形象の源流は今もなお不明である。河南省南陽で出土した漢代の煉瓦の像や山東省東嘉祥武氏祠の漢代の石彫画像は、女媧と伏羲はいずれも「人面蛇身」である。そして、多くの怪物を記述する『山海経』などのように、古書に女媧のような「半人半獣」の怪物はけっして珍しくなく、比較的普遍的な現象なのである。上記のことからすれば、半人半獣という外貌は漢の時代にすでに女媧の標準的な肖像として定着した（注5）と言ってもよいようである。

II. 女媧は腸をもって人と化し、土を捏ねて人を造る

権威ある史書『史記』『三皇本紀』に、女媧が土を捏ねて人を造ったことに関する記述はなく、のちに述べる他の功績が記されている。ただ、周知のように、この『史記』『三皇本紀』の部分は、司馬遷が執筆したものではなく、唐の司馬貞がその補いとして書いたものである。つまり、女媧の土を捏ねて人を造った話は、司馬遷の時代になかったか、司馬遷が故意にその部分を外したか、あるいはその記述が失われたかなどと考えられる。

しかし、この神話は民間で古から代々語り継がれていたことは事実である。たとえば、屈原は『楚辞』『天問』の中で「女媧を立てて帝としたのは、誰が導いてあがめたのか」「女媧の不思議な体を、誰がそれを制作したのか」と問う。このことから、遅くとも屈原の戦国時代に女媧に関する伝説がそうとう広く伝えられたことは明らかである。

有神十人、名曰女媧之腸、化為神。（『山海経』『大荒西経』）

神あり、十人、名は女媧の腸、化して神となる。

上記の記述は古書で見られる女媧に関するもっとも早いもの（注6）である。「化」は、化育することであり、化生することである。盤古が万物を化生したように、女媧も人間を化生したのである。この「化」の一文字で女媧の優れた繁殖力をもつ神聖女としての不動の地位が確立されたと言っても過言ではなかろう。そして、ここにある「腸」とは、一般的意味で言う腸ではなく、お腹や女性の生殖器官を指すものとも考えられる。

女媧の「腸化為神」という伝説より、土を捏ねて人を造ることが民間で代々語り継がれ広く知られている。

俗説天地開闢、未有人民、女媧搏黄土作人。劇務、力不暇供、乃引繩絙于泥中、拳以為人。（『太平御覽』）

天地が開闢したときには人がまだいなかったのが、女媧が黄土をまるめて人を造った。しかし、きわめて劇務であったのに、力を費やす暇がなく、縄を泥の中で引き回し、引き上げて人を造った。

古人にとって、土は器を作るためのもっとも基本的素材であるし、そして天を父とし、地を母とする中国文化の視点からすれば、この神話はかなり合理的なものである。

一方、「乃引繩絙于泥中、拳以為人」、すなわち、一人ずつ造るのではなく、繩を泥に引き回して、これを引き上げることによって、大量生産をしたことである。この繩は、普通の意味で言う繩ではなく、男根のことであり、ふるい落とされた泥のはねが精液であり、そしてこの行為は男女の交尾を暗示するという説（注7）もある。

しかし、この解釈は興味深いものであるが、神話誕生の時代背景や古人の哲学に即すれば、どうやら牽強付会のようにあり、それより素直に読解した方が順当と思われる。なぜならば、女媧は、疲れて力不足と感じてそうやったものであるし、かつ人間創造の材料である泥その素材も変えず、ただ手動の代わりに繩という道具を使っただけとなり、いわば人間創造の基本的な環境や条件は一変もしないからである。

Ⅲ. 女媧、天を補う

女媧が天を補修したことについて、『淮南子』「覽冥訓」にはこう記されている。

往古之時、四極廢、九州裂。天不兼覆、地不周載、火煙炎而不滅、水浩洋而不息。猛獸食顛民、鷲鳥攫老弱。於是女媧煉五色石以補蒼天、斷鰲足以立四級、殺黑龍以濟冀州、積蘆灰以止淫水。

遠い昔のとき、四極が崩れたため、九州の大地は裂けた。天は地を覆いつくせず、地は万物を乗せ尽くせず、火は盛んに燃え広がって消えず、洪水ははてもなく広がってやまず、猛獣は民を食い殺し、鷲鳥は老弱に掴みかかった。そこで、女媧は五色の石を煉って蒼天を補修し、鰲の足を切って四極を立て直し、黒龍を殺して以て冀州を済い、蘆灰を積んで以て陰水を止めた。

天が崩れた原因、女媧が天を補修した経緯について、二説がある。『列子』「湯問」には、「天地も物である。物には不足がある。ゆえに昔女媧が五色の石を煉ってその欠けたところを補い、鰲の足を切ってそれをもって四極を立てなおした」とある。この「天地不足」説は一家言とされつつもそれほど影響力はない。これに対し、『淮南子』「天文訓」の記述は古来広く認められている。

昔者共工與顛頊爭為帝、怒而觸不周之山、天柱折、地維絕。天傾西北、故日月星辰移焉。地不滿東南、故水潦塵埃歸焉。（『淮南子』「天文訓」）

むかし、共工は顛頊と帝位を争い、激怒したあげく不周の山にぶつかった。そのため、天柱が折れ、地維が断ち切れた。それで、天は北西に傾き、日月星辰も移った。また、地は東南が落ち込んだゆえ、水や塵埃はその方向に帰することになった。

『淮南子』の外、『論衡』「談天篇」（注8）にもほぼ同じ記述がある。天地開辟や人間創

造の神話は、各文明の中に多く見られ、かつ共通的・相似的なものも少なくないが、しかし破損した天を補修するという話は他文明の神話に見られず、きわめて希有なものである。

女媧は「五色の石」（白、黒、赤、黄、青）をもって天を補修したというが、この「五色の石」とはいったい何のものであったろう。

宋の羅泌『路史』（注9）には、「煉石成赧」すなわち、石を煉って夕焼けとなるという説があるため、女媧が天を補修した五色の石は五色の夕焼けであろうとの推論がある一方、五色の石は実はただ普通の石であると思われる。

『淮南子』『脩務訓』に、「禹生于石」とある。『西遊記』の孫悟空も石より生まれた。玉などの石をアクセサリや飾り物、またお守りとして愛される民俗風習は、昔より現代まで中国のほぼ全域で代々継がれている。すなわち、霊性ある石は、観賞や審美の価値があるのみならず、厄払いやお守りの効用もあり、生殖とも関係すると思われるからである。

石崇拜を女媧の天を補修する神話の文化背景として女媧の「五色の石」を検証すれば、そこには多重で深い意義があるようである。

強い生命力や神性があるゆえ、石は巨大なエネルギーを持つ神秘的生命の本源となるが、天地間の基本色を含む「五色の石」を以って損壊した天を補修するならば、天は本来のバランスを取り戻し、よって天は安心、安全、完美となるのである。したがって、この天を補修するという行為は、簡単な修復作業ではなく、「五色の石」をもって天の属性とその効用を復活させる、一種の神聖な儀式でもあるのである。

そして、中国文化の中で、「五」はきわめて重要な数字である。木、火、土、金、水の五行思想はむろん、徐整『三五歴記』に「数起于一、立于三、成于五、盛于七、処于九」とあり、九個の自然数の中で、五はちょうど真ん中に位置し、不偏不党であり平衡を保つ意義もある。この文化的要素から考察すれば、女媧の「五色の石」は中国の文化思想と深くかかわっていることが分かる。

女媧の天を補修する作業の今一つの重要な内容は、鰲の足を切って崩れた天を立て直し、葦の灰をもって氾濫した洪水を堰き止めたことである。

『淮南子』に「断鰲足以立四極」とあるが、高誘注によれば、「鰲、亀也、天廢頓以鰲足柱之」という。つまり、天が機能しなくなり崩れたため、鰲の足を以って東西南北の四極で支えたのである。中国では古、天は丸い形で、地は四角いものであり、四方にそれぞれ巨大な柱で天を支え、そしてこの大地は巨大な亀に載せられるものとされていた。この古い宇宙観は女媧神話でも取り上げられ、過不足なく活用されている。

鰲の足で天を支えること同様に、葦の灰をもって氾濫した洪水を堰き止めたのも一種の儀式、いわば呪術である（注10）と考えられる。

女媧の天を補修した神聖な奮闘により、「蒼天補、四極正、陰水涸、冀州平、狡虫死、顛民生」（蒼天は修復され、四極は正され、洪水は消え、冀州は平坦になり、猛獣は死に、民は生き残った）となったのである。

IV. 婚姻制度を定め、人類を繁殖させ、笙簧を發明し人類を教化する

人を造った人間の始祖として、女媧はまた人間が繁殖し代々生息していけるように、婚姻制度を定めた。

女媧禱祠神、祈而為女媒、因置婚姻。（『風俗通』）（注11）

女媧が神祠に祈って、女媒になり、婚姻制度を設けた。

この『風俗通』の外、『路史』にもほぼ同じ内容の記載も見られる。そして、『路史』にはさらに、女媧は女婦の姓氏を正し、婚姻を司る。仲人を通ずる婚姻が万民の倫理的関係を重んじたため「神媒」とされるとある。

原文では、「因通行媒、以重万民之判」となるが、中の「判」に対する解釈はさまざまであるが、可否や白黒を区別し見分けるという意味に基づき、女媧は婚姻制度を以って万民の婚姻の可否と相互の婚姻関係を明らかにするようになったことから、ここの「判」をあえて「倫理」と解釈してもよいようである。「神媒」である女媧の偉大な功績を讃えるため、古の人は春に記念の儀式を行い、女媧の神性の復活を祈っていたのである。

女媧が婚姻制度を設けた以前、すなわち母系社会の昔は、男女は雑婚であったと思われる。『淮南子』「本経訓」に「男女群居雜処無二別」とあり、『列子』「湯問」（注12）にも「男女雜遊、不聘不媒」とある。そして『呂氏春秋』（注13）にはさらに「其民聚生群處、知母不知父、無親戚兄弟夫妻男女之別、無上下長幼之道」と記されている。

上記によれば、群居していた先史時代の人々は、親族関係や婚姻関係は一切なく、母を知っても父を知らない、いわば文明未開の時代であった。女媧の婚姻制度の確立によって、先史文明史上で大きな一歩を踏み出し、人の自然性や野蛮性を是正し、文明的な婚姻制度ならびに人間の倫理関係を確立したことによって、人類は史的な文明進歩を成し遂げたわけである。

女媧の婚姻制度は、自ら率先して完成させた記述がある。女媧の婚姻に関する記述に、もっとも古い『独異志』（注14）がある。

昔、宇宙が初めて開闢されたとき、女媧兄妹二人だけが崑崙山にいた。天下にはまだ人はいかなかった。二人は夫婦になろうとしたが、自ら恥ずかしかった。それで、兄は妹と崑崙山に登り、「もし天がわれわれ二人を夫婦になるように遣わされたなら、煙を合わせてください。もし違うなら、煙を散らしてください」と祈った。すると、煙は合わさった。それで、妹はすぐ兄に従い、そして草で扇を作って面を隠した。今も、人々は結婚する際に扇を手にするが、そのことに由来したのである。（『独異志』）

この「煙を合わさって成婚する」話の中の兄は、いったい誰か。古書に確たる記述はない。しかし、その傍証となるものは少なくない。結論を先に述べると、結婚の相手となった女媧の兄は伏羲である。

第一、前記の漢代『通志』「三皇紀」(注15)にある「華胥生男子為伏羲、生女子為女媧、故世言女媧伏羲之妹」に基づき、あるいは同じ伝承源によって、民間では女媧の兄を伏羲としている。第二、漢代の伏羲・女媧図(注16)では、二人はいずれも上半身は人体であり、下半身は蛇体である。しかも二人は交尾の状態をあらわしている。伏羲は矩、女媧は規を手を持っており、二人が文明を規制することが描かれていると思われる。他にも、アスタナ古墓群など唐代の古墓から出土した伏羲女媧図も前記とほぼ同じ形をしている。第三、中原や晋東あたりの民間で口頭伝承されている神話の中でも、大洪水により伏羲と女媧の兄妹二人だけが生き残り、人類を繁殖するために、やむをえず天意を伺ったうえ結婚した話は、広く語り継がれている。他にも、大同小異の伏羲女媧兄妹結婚の民話が多数あるが、ここでは略す。

以上の記載と文化遺跡により、この伏羲女媧兄妹の結婚という話は、ほぼ定論になってきた。しかしながら、中国神話の全般およびその内容からこの定論を検証すれば、それは齟齬するところが生じる。

まず、「華胥生男子為伏羲、生女子為女媧、故世言女媧伏羲之妹」となっているが、しかし、この話は女媧の人間創造というより古い時代のものであるはずの内容と抵触している。つまり、女媧はこの天地間にいた際には誰もいなかったから人を造ろうとしたわけなので、兄など他の人は一人もいなかったのが合理的なのである。

そして、天を補修する神話の中で、伏羲が脇役としても登場することなど一切見られず、終始女媧がその主人公をなしたことから、伏羲の不在が反証された。

したがって、筆者の仮説と推論にすぎず、今後の更なる実証が必要であるが、女媧と伏羲はおそらく、先史神話の中でもそもそも無関係の別々のものであったが、民間で口頭伝承されていた過程において何らかの原因により人為的あるいは無意識的にその内容が変更されたため、以降、伏羲・女媧兄妹説とりわけ兄妹結婚に至ったもの(注17)であろう。

むろん、『淮南子』「覽冥訓」に「伏羲、女媧不設法度、而至遺徳于後世」との記述があるが、ここでは二人は併称されていても、二人の関係は明示されないし、かえってそれぞれ男神と女神の代表として二人の功績により併称されたものと理解すればよいと考える。

むろん、成婚を以って人間を繁殖させるということは、女媧の人間創造の第三方式であり、その最低かつ最終段階の作業と言ってもよいのである。

女媧は、また笙簧を発明し人類を教化していた。女媧が笙簧を発明し音楽を作成して人々を教化したことについて、『世本』「作篇」(注18)に、「女媧作笙簧」との記述がある。『路史』「後紀二」にもより詳しい記述がある。「女媧は、自分に随って笙簧を制作し風俗を通すよう臣に命じた。娥陵氏に都良の管を作って、天下の音を統一しようと命じた。聖氏に班管を作って日月星に合わせようと命じた」

中華文明の進展を促進するために、上記の女媧の功績は燦燦たる偉大なものと言わざるをえないであろう。

V. 女媧神話の流伝地域およびその起源

女媧神話は、ほぼ中国の全域に広がり、中国人であれば知らない人はほほいないほどである。女媧神話やそれに関連する文化遺跡などを記述する主な著書に、『山海経』、『路史』、『太平広記』、『世本』、『述異記』、『揮塵記』などが挙げられる。

紙幅により記述の内容について一々言及しかねるが、女媧の文化遺跡は江西省南康と四川省峨眉山を除いて、ほぼ中国の全域に分布している。その中で、山西省と河南省を中心とした黄河中下流域に密集している。

女媧に関係する民間における文化習俗や信仰は今も多く見られ、内モンゴル、チベット、雲南、北京、天津を除けば、他の地域ではいずれも観測された（注19）。その中で、河南、山西、河北、湖北、陝西、甘肅、四川、浙江などの地域がもっとも盛んで豊富である。

女媧文化遺跡が中国のほぼ全域に広がっているため、女媧文化の起源について諸説がある。その中、「南方説」と「北方説」がもっとも代表的なものであり、対立している。中国神話研究史で開拓的な貢献をした茅盾氏らを代表とした研究者は「北方説」を主張し、袁珂氏を代表とした研究者は「南方説」を主張する。「南方説」とする主な根拠として、女媧と伏羲が南方の少数民族である苗瑤民族または四川省に起源したものと指摘している。

この「南方説」より「北方説」の方が賛同を多く獲得している。第一、女媧神話が誕生した前史に、南方はなお荒涼たる地帯であったはずである。第二、女媧神話に関する文献もほぼ北方系の文明に関わりを持つものであり南方の文明体系とほぼ関わらない。第三、文明進展の視点からすれば、唐宋時代に文明が次第に形成したとされる南方の苗瑤民族に比べ、北方の中原地域における文明開始の時期も早いし、文明の程度もはるかに高かったと考えられる。したがって、「南方説」より早期・高度の文明を有する中原文明の土台に誕生された「北方説」が、史籍や現存の文化遺跡から共に支えられている。

これまでの統計（注20）によると、女媧神話は主に漢民族地域で伝承され、247個の女媧神話の中で、漢民族地域で流伝されたのは235個であり、全体の95%を占めている。このデータも上記判断の有力な裏付けとなるのであろう。

山西省および太行山地区の女媧文化の分布を見てみよう。その地域に女媧が土を捏ねて人を造ったとされる場所や「後土廟」などの遺跡がある。『浦洲府志』卷二十三の「事紀」によると、黄帝が「後土廟」を祭ったことがある。つまり、女媧は黄帝の時代から大々的に祭られたのである。そして、晋南吉県西南の清水河に「女媧岩画」があり、1万年以前の中石器時期の物であるという。岩石に書かれた女媧は、頭の上方に七つの丸いものがあり、スバルと見られる。女媧の両手が平らに挙げ、右手に物を持っているが、これは石を煉って天を補う情景と思われる。女媧の両足が開いて、その下に六個の丸い点があるが、これは女媧が人類を繁殖し万物を創造する象徴と見られる。そして、晋城の水東村にある「女媧氏鍊石処」、「媧皇窟」、「媧皇廟」、同市の北村にある「媧皇聖母廟」などが代表的なものである。平定県東浮化山の「媧皇廟」、「鍊石灶」、「補天台」なども有名である。

陝西省および漢水流域の女媧文化。陝西省の女媧文化は主に陝西の驪山一帯に遺存されている。あそこには、「老母殿」、「人祖廟」、「鍊石処」、「補石台」などがあり、また伏羲と

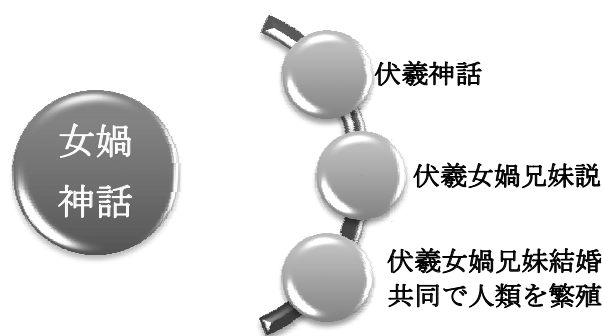
女媧が結婚するために天を問ったと言われる旧跡などがある。漢以降、民間では「天穿節」があり、明楊慎『詞品』によると、宋の時、正月の二十三日を「天穿節」とし、女媧が石を以て天を補修したとして煎餅を家の屋根におき、天を補うことを象徴するという。この他にも数多くの関連の風習がある。陝西省の平利県内にも非常に豊富な女媧文化がある。『路史』「後紀二」には、「中皇山之原、所謂女媧山也」との記述がある。ここの「中皇山」は女媧山のことであり、女媧が土を捏ねて人を造った場所とされている。この一帯では、女媧に関する伝説が数多くあり、今も民間で代々伝えられ、そして正月の七日を「女媧誕生日」、十月の四日を「伏羲誕生日」、十二月の八日を「女媧兄妹成婚日」として関連の祭りが行われている。湖北省にも、多数の女媧文化遺産があり、その中、竹山は女媧が人間創造および天を補修した聖地とされている。

中原の中心である河南省が女媧神話文化の中心と見られる。女媧神話は中国のほぼ全域に広がっているが、その中心は中原地帯、とりわけ河南省にあり、女媧神話の文化遺産が密集している。『旧唐書』、『寰宇記』などの記述によれば、女媧の陵墓は三門峽の靈宝黄河沿岸の風陵渡あたりにある。女媧関連の文化は、済源、沁陽、衛輝など太行山の周辺地帯にも密集している。『路史』では、太行山の別称を「女媧山」、古くは「女媧天を補う処」と記されている。この地方では関連の神話伝説はかなり詳細である。

VI. 女媧の人造りにおける「性」の問題

女媧が天を補修し、婚姻制度を設立し、楽器を発明したことについて、古書の記述や伝説に相違点があっても、内容的・ロジック的に相互矛盾するところはそれほどない。これに対し、女媧の人造りの方式において、かなり背馳するものがある。

すなわち、女媧は一人で土を捏ねて人を造った説と、伏羲と共に人間を繁殖させた説、という二つの系統（下記図1参照）に分けられ、後者にはさらに兄弟結婚などさまざまなバリエーションに展開されている。



(図1)

この問題に関して、先行研究ではそれほど重視されておらず、ただ異なる古書の異なる記載と、異なる口承や異なる解釈により、それぞれ異なった女媧神話になったという程度

の解釈にとどまり、中国文化のより深い次元からの考究などはほぼ見られない。

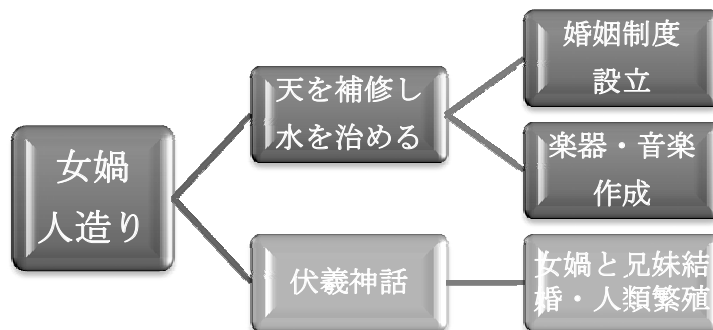
しかし、この問題は女媧神話の根幹的なサブジェクトであるのみならず、中国文化や先史文明に対する認識の歴史観にもかかわる重要な問題と考え、以下推論を試みたい。

女媧が独自で人を造ったことと、伏羲と結婚して人類を繁殖させたという相対立するこの二説は、どちらが神話史上において相対的な正統性を持ち、かつ中国文化の神髓を反映しえるのであろうか。

女媧神話について、民間で口頭伝承中においてその内容は人為的に増減、変更されていたものと思われる。それに『通志』『三皇紀』等に、「華胥生男子為伏羲、生女子為女媧、故世言女媧伏羲之妹」のような記載があるため、ついに『独異志』等のような女媧の兄妹結婚に至ったと考えられる。

伏羲について、唐代の司馬貞が前漢代の『史記』に補った「三皇本紀」に伏羲を「人の頭、蛇の体、聖徳あり」と記す。『路史』には「婚礼の制度を定め、雌雄一對の鹿の皮を結納の品とする」とある。この他、『楚辞』、『礼記』、『淮南子』、『太平御覽』、『古史考』、『世本』などの文献にも伏羲が言及されているものの、これらの文献の中から、伏羲と女媧の兄妹結婚などの記載は見られない。そして、女媧に関しても、古書ではほとんど独立した女神として記述されるのであり、兄妹とりわけ夫婦として共に活動することは見られない。

したがって、現存の史料から判断すれば、伏羲と女媧が兄妹結婚し人類を繁殖させた話は、唐代末期から庶民の間で次第に浸透され、それによってそれ以降の著書や地方志にも影響を及ぼすようになり、そしてそれに関連する文化遺跡もそれにともなって人為的に営まれていったものとも考えられる。次の図2でその関係を概観しよう。



(図2)

たしかに、伏羲と女媧の兄妹結婚は、古い伝説、古書の記載、さらには壁画など文化遺産から裏付けられている。しかし、古い伝説や古書の記載に、誤伝や誤記が皆無とも断定しえないし、伏羲女媧図のような画は一見して交尾しているように見えるにもかかわらず、その図はたとえば「陰陽の結合により万物を生じる」などを意味する多義的なものであるべく、必ずしも交尾するという単一で表層的な含意には留まらないはずである。しかも、その男女が真に伏羲と女媧であることもより確たる実証が必要なのである。

女媧は黄土を捏ねて人を造ったというのは、すなわち女神の女媧は男性なしに独自で生育することができることである。奇想天外のようなこの無性生殖をどう見ればよいか。

一般的に、たとえ女神であっても男神なしでは生育できるとは考えられない。このような論断は至って合理的と思われるが、しかし、女媧人造りのケースに即して考察すれば、必ずしも妥当とは言えない。何故ならば、この論断は女神としての女媧の神話史上における特殊性と、彼女の有する特殊本領とりわけ中国伝統文化の神髓をぬきにした実証科学的な推論に過ぎないからである。一言で言えば、女媧神話は中国の伝統文化の一反映であり、生命、宇宙、人類についての説を説いた道学の視点から考察しなければ、その正体や真義を察し得ないのである。

『老子』に「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生じる。万物は陰を負い、陽を抱いている」とある。中国文化の基本および神髓は道家の理論である。老子のこの論は、万物生成の原理として中国文化を一貫し、統括している。

注意すべきは、「一は二を生じる」と「万物は陰を負い陽を抱いている」ことである。老子の論に関する解釈はまちまちであるが、この「万物は陰を負い陽を抱いている」とは通常、宇宙間のいかなるものでも陰と陽が自身の中に同時存在すると理解されている。そして、「一は二を生じる」というのは、宇宙や事物や生命が繁栄、進化する過程においてもっとも重要な段階であり、すなわちこれは単数より複数へ、個体より多体へ、単純より複雑への変化するプロセスであり、いわば変化をもたらす必須不可欠のステップなのである。しかも、その「一」が「陰陽一体」のものでなければ、断じて実現しえないはずである。したがって、女媧は「一」でありつつも、陰陽一体の女神であるゆえ、単性であっても「二を生じる」ことができる能力を備え、よって生命を育成することができるのである。

中国の神話の中で多く見られるように、神話の舞台は往々にして超現実的であり、時には地上、時には天上、時には冥界、あるいは立体的な多空間で実現される神の仕業であって、なかなか一定しえないのである。それらと同様に、女媧の人造りもそういった文化的な背景に行われたものであり、後人の研究も同一の文化背景と同一の視点をもって考察しなければ、その要を得ない。

女媧の人造りは神話であるだけに、人世という単一次元において行われたというより、超次元的な多次元・多空間において完成されたもの（注 21）と推断しても不妥当ではない。換言すれば、女媧の人間造りは、多次元・多空間で完成されたものであるからこそ、その作業方式や生産成果が多々の超現実的な奇跡を見せたのである。

要するに、女媧の人造り神話の誕生した時代背景や中国文化の神髓から考究すれば、女媧の単性生殖および人造りの奇跡は、少しも不条理の要素がなく、かえってきわめて合理で自然的である。

まとめ

前史の諸神話の中で、女媧神話は戦国時代の文献『山海経』、『離騷』を経て、漢代の『淮南子』、『風俗通』に至り、人間創造と人世救済の女神として女媧の地位が次第に確立され、

唐宋時代の文献『独異志』、『路史』になるとさらに婚姻制度を定め、楽器・音楽を制作する文化の祖などの内容が加わった。すなわち、伝承における内容的な総合、融合、増減によって、女媧神話が次第に豊富となっていき、本来の原始的な人類創造から天地開闢さらには文明教化へと展開していったのである。

女媧は人を造り、天を補修し、地を治めたが、これらの偉業は、伝統思想の天地人という三才にそれぞれ対応しており、そして婚姻制度を定め、楽器・音楽を作るなど人類文明の進展をもって、女媧神話を立派に完成させた。女媧は、生命創造、天地開闢、文明開化という三つの栄冠を共に有することは、中国神話史上において女媧神話を他には例を見ないのである。

女媧神話は、盤古の天地開闢に次いで、この世に登場しかつ三才においても煌々たる偉大な功績を残したものとして、きわめて意味深いものである。すなわち、中国の神話は女媧の登場によって、天上から人間界へ展開され、また人間界と天界とのつながりや相互作用によって、中国文明の明けの明星が現れ、それと共に中国文化の基礎もひそかに定められていったのである。

注

1. 劉安（前 179 - 122、前漢の武帝の頃、淮南王が学者を集めて編纂したという）『淮南子』覽冥訓。
2. 李智信『媧神論』、『青海民族研究』、2007 年第一期。
3. 趙国華『生殖崇拜文化論』、中国社会科学出版社、1992 年、第 371 頁。
4. 楊堃『女媧考——論中国古代的母性崇拜与罔騰』、『民間文学論壇』1986 年、第 6 期。
5. 閻德亮『中国古代神話文化尋踪』、人民出版社、2011 年、22 頁。
6. 同上、第 23 頁。
7. 何根海『女媧引繩為人之謎的文化破解』、『民間文化』2000 年第 11 - 12 期。
8. 『論衡』、後漢時代の王充（紀元 27 - 1 世紀末ごろ）が著した著作、自然主義論、天論、人間論、歴史観など多岐多様な事象を説きつつ、先哲、陰陽五行思想、災異説などを迷信論として徹底的に批判したところが特徴である。
9. 羅泌（1131 - 1189、南宋吉洲蘆陵の人）『路史』は、凡て 47 卷、雑史とされる。三皇五帝から夏桀までの歴史、地理、風俗、伝説、史実などを記したものである。神話的色彩が濃厚で、不思議な怪事が多く記されている。それゆえ、古来歴史家から疎遠される。
10. 閻德亮『中国古代神話文化尋踪』、人民出版社、2011 年、27 頁。
11. 応劭（? ~ 204 年、）の著作。後漢末泰山太守などを務めた。原著は 23 卷であったが、現存は 10 卷と附録 1 卷。本著は大量の神話や異聞を記録している。元、『風俗通義』としたが通称『風俗通』、四庫全書提要によれば、何故か知らないが、義という文字が削除された。もしくは『白虎通義』が『白虎通』とされたように、習慣によりその字が略されたかもしれない。

12. 列子（?～?）春秋戦国時代の人、本名は列御寇、列子はその尊称。老子や荘子のほか、道家思想の代表的な思想家とされる。事故寓言と神話伝説が特異な色彩があり、教育的な作用も多々あるので、今日も愛読される。著書『列子』は前450年から375年までの間に編成された。
13. 戦国時代末期、秦の政治家・呂不韋（?～235年）が食客を集めて共同編纂させた書物であり、秦の始皇帝8年（前239年）に完成した。12紀・8覧・6論から構成され、凡そ26巻160篇。儒家・道家を中心としつつも名家・法家・墨家・農家・陰陽家など諸学派の説も幅広く取り入れ、雑家の代表的な書物とされる。
14. 唐の李冗『独異志』。
15. 南宋鄭樵の著作、断代史を批判して通史である『史記』をまね、作成したもの、全200巻。『通典』『文獻通考』と並んで「三通」と評される。
16. 伏羲・女媧図は漢武梁祠壁画、中国山東省任城にある、漢代の武梁祠という墓の壁画の中で、伏羲と女媧の像がある。
17. この問題について、今後の課題として考究してみたい。
18. 『世本』は戦国時代趙国人に編纂された史籍、黄帝以来の漢の高祖までの史実を記述し、『帝系篇』『王侯世』など原15編。秦末までの底本もあるので、後人が付け加えたものと思われる。『世本』の原本は、その後の乱世に消えたが、清の学者たちがさまざまな典籍よりその一部を集め、輯注を加えたことにより、その全貌をうかがい知ることができた。中華書局は1957年、清の8人の学者がそれぞれ編纂した『世本』輯本を収録し、出版した。
19. 5に同じ、33頁。
20. 楊立志、饒春球「女媧信仰的発源地研究総述」、『鄖陽師範高等専科学校学報』2005年第4期。
21. この論断を今後の研究課題とする。